

『庄内浜荻』調査データの多変量解析

半 沢 康

キーワード：方言変化、実時間調査、多重対応分析、グロットグラム

1. 目的

本稿では山形県庄内地方で実施した方言調査の報告を行う。

庄内地方の中心都市である鶴岡市では、国立国語研究所による社会言語学的多人数調査が戦後 20 年おきに継続して行われ、世界的に類をみない貴重な縦断的データが蓄積されている（統計数理研究所・国立国語研究所 2014）。庄内地方全体についても、庄内方言地図(LASD)や庄内グロットグラム(SGLT)、山添地区実時間調査（井上 2005, 2011）など多様な調査研究が行われており、井上 1985, 1994, 2000 ほか多数の成果が公表されている。さらに庄内地方は、『庄内浜荻』などの近世期に編まれた地域文献も豊富であり、近代以前の古い方言の様子を探ることもできる。日本の方言研究にとってメッカともいえるべき大変重要な地域である。

戦後すぐに行われた上記国立国語研究所による第 1 回目の調査（国立国語研究所 1953）では『庄内浜荻』（以下『浜荻』）に立項された語の残存状況について調査が行われている。この追跡調査として 2018 年に再度調査を実施した。2 回の調査データにもとづく分析・考察は、これまで複数の論文にて公表しているが（井上 2018, Inoue & Hanzawa 2020, in press, 井上・半沢 2021a, 2021b, 2021c, 投稿中）、紙幅制限のため、いずれの論考でも調査の詳細について述べることができていない。また多変量解析を用いたさまざまな分析や、それを図化した結果の一部も割愛せざるを得なかった。以下では、これら個々の論文で示しえなかった調査の実際を詳述し、さらに未公表の分析結果の一部を紹介して、他の関連論文を補完する。

2. 調査の概要

2.1. 第 1 次調査

本研究のベースラインとなる調査（以下第 1 次調査）は、国立国語研究所によって 1950 年に実施された。調査の詳細は国立国語研究所 1953 を参照（pp. 11-12, p. 258）。

『浜荻』掲載の方言形 406 項目（以下「浜荻語彙」）について、残存状況、使用実態に関する調査が行われている¹。調査は当時の市町村（「昭和の大合併」以前）を基準として 30 地点が選定され、そのうちの 27 地点（図 1 および表 1 参照）からデータが得られた。各地点とも当時の高年層、中年層、若年層 3 世代男女各 1 名計 6 名を対象に調査が行われている。ただし地点によってはある世代が欠け、またはその代わりに別の世代のインフォーマントが追加されるなど、方言調査一般にみられるように、計画した全世代がすべての地点でそろっているわけではない。多人数調査の対象地点であった旧鶴岡市では他地点の倍のインフォーマントから協力を得ている。国立国語研究所 1953 には、各地点とも 1 名（旧鶴岡市のみ 2 名）の調査員に調査を委託して調査を行ったとある。

国立国語研究所に保管されているこの第 1 次調査の調査票を借り受け、結果を電子データ化した。総



図1 調査地点

インフォーマント数は168名。各世代インフォーマントの生年平均値は高年層1890年、中年層1910年、若年層1925年であった。以下では高年層から順にそれぞれ第1, 2, 3世代と呼称する。

2.2. 第2次調査

第1次調査の追跡調査（以下第2次調査）は2018年から開始し、2019年に終了した。第1次調査から約70年後、『浜荻』成立からは約250年後の追跡調査と位置付けられる。第1次調査で実際に調査が行われた27地点を対象とした。

2.2.1. 協力機関等

インフォーマントの紹介にあたっては表1に示す各地の公的機関等より、以下の通り多大なご協力をいただいている。

1950年当時の地図や旧市町村名等を手掛かりに、自治体のweb情報等から第1次調査の調査地点に存するコミュニティセンター等の公的機関をリストアップし、それぞれの機関にインフォーマントを紹介いただきたい旨の依頼状を発送した。紹介を依頼したインフォーマントは各地点8名。当該地域出身、在住の高中若少年層4世代男女各1名を探していただき、連絡先等の各種情報をまとめたリストを返送してもらった。リスト到着次第、福島大学から各インフォーマントへ自記式質問紙を送付し、一定期間ののちに返送いただくようお願いをした。調査票には返信用封筒および薄謝（調査票記入用を兼ねた大学名入りボールペン）を同封した。回収率向上のために、返信用封筒には料金後納などの印刷を行わず、実際に切手を貼付した（林2006）。地点によっては公的機関へまとめて調査票等一式を送付し、担当者

表1 協力機関等一覧

NO	調査地点	現市町	協力機関名
0	鶴岡市	鶴岡市	鶴岡市第二学区コミュニティ・防災センター
1	袖浦村	酒田市	宮野浦学区コミュニティ防災センター
2	京田村	鶴岡市	京田コミュニティ防災センター
3	大山町	鶴岡市	大山コミュニティセンター
4	加茂町	鶴岡市	加茂コミュニティセンター
5	田川村	鶴岡市	田川コミュニティセンター
6	豊浦村	鶴岡市	三瀬コミュニティセンター
7	温海町	鶴岡市	温海公民館
8	福栄村	鶴岡市	鶴岡市 小国山村振興センター
9	念珠関村	鶴岡市	鼠ヶ関公民館
10	大泉村	鶴岡市	鶴岡市朝日南部コミュニティセンター
11	黒川村	鶴岡市	黒川下自治区
13	手向村	鶴岡市	手向地区地域活動センター
15	藤島町	鶴岡市	藤島地区地域活動センター
16	押切村	三川町	三川町公民館
17	余目町	庄内町	余目第一公民館
18	新堀村	酒田市	新堀コミュニティ防災センター
20	飛島	酒田市	飛島コミュニティセンター
21	吹浦村	遊佐町	吹浦まちづくりセンター
22	高瀬村	遊佐町	高瀬まちづくりセンター
23	西遊佐村	遊佐町	西遊佐まちづくりセンター
24	日向村	酒田市	日向コミュニティセンター
25	本楯村	酒田市	本楯コミュニティセンター 鳥海八幡中学校
26	東平田村	酒田市	東平田コミュニティセンター
28	田沢村	酒田市	田沢コミュニティセンター
29	上郷村	酒田市	南部コミュニティセンター
30	酒田市	酒田市	琢成学区コミュニティ防災センター

に調査票回収までお願いした場合もある。回答を寄せてくださった方々へは、礼状とともに庄内方言に関する小冊子（井上他編 2018）をお送りした。

おおよその調査時系列は以下の通りである。

- 2018年2月 全27地点へ依頼状を発送。回答のあった9地点のインフォーマントへ調査票を送付。
- 2018年3月 さらに返信のあった5地点のインフォーマントへ調査票を送付。この時点で予定の半数の地点から回答をいただく。中若少年層インフォーマントの紹介がなかった地点については、福島大学の当該地点出身学生に依頼して補充調査を行った。
- 2018年5月 未回答地点へ再度依頼状を発送し、5月末に各機関を訪問して協力を依頼。さらに8地点の協力を得た。
- 2018年8月 回答のない5地点について、鶴岡市教育委員会社会教育課、酒田市教育委員会社会教育文化課、酒田市生涯学習施設里仁館へ協力を依頼。お声がけをいただき、地点によっては他の機関等を紹介いただくなどして2019年2月までにすべての地点から回答を得る。
- 2019年2月 各地点で紹介が得られなかったり、調査票を返送いただけなかったりした世代のインフォーマントについて、鶴岡市、酒田市教育委員会に再度ご協力をあおぎ、各市役所

職員等から該当の方を紹介いただく。本楯地区については、酒田市教育委員会の仲介により、鳥海八幡中学校を通じて補充調査を実施。

このように、庄内地方の各コミュニティセンター、公民館、自治会、中学校の皆様には本調査の実施にあたり、さまざまにご尽力をいただいた。さらに鶴岡市教育委員会社会教育課、酒田市教育委員会社会教育文化課、酒田市民生学習施設里仁館の関係者の皆様には、本調査へのご理解をいただき、各種のご教示、お力添えを賜った。いずれもあらためて深く感謝申し上げる次第である。

2.2.2. インフォーマント

第2次調査では各地点とも4世代男女合計8名の方に協力をいただいた。長時間にわたって調査票の記入をいただいた皆様にあらためて謝意を表す。

各世代の生年の平均値は、高年層1944年、中年層1962年、若年層1982年、少年層2002年となる。以下、順に第4、5、6、7世代とする。第1次調査と合わせると、100歳以上の年齢差を通覧できる。

2.2.1に述べた通り、さまざまに地域のご協力をいただいて補充調査を行ったが、なおインフォーマントがみつからなかったり、あるいは調査票を返送いただけなかったりして特定世代が欠ける場合がある。また逆に地点によっては同一世代の方を複数紹介いただいた場合もある。最終的には206名の方から回答を得た。第1次調査と合わせると374名のデータが得られたことになる。

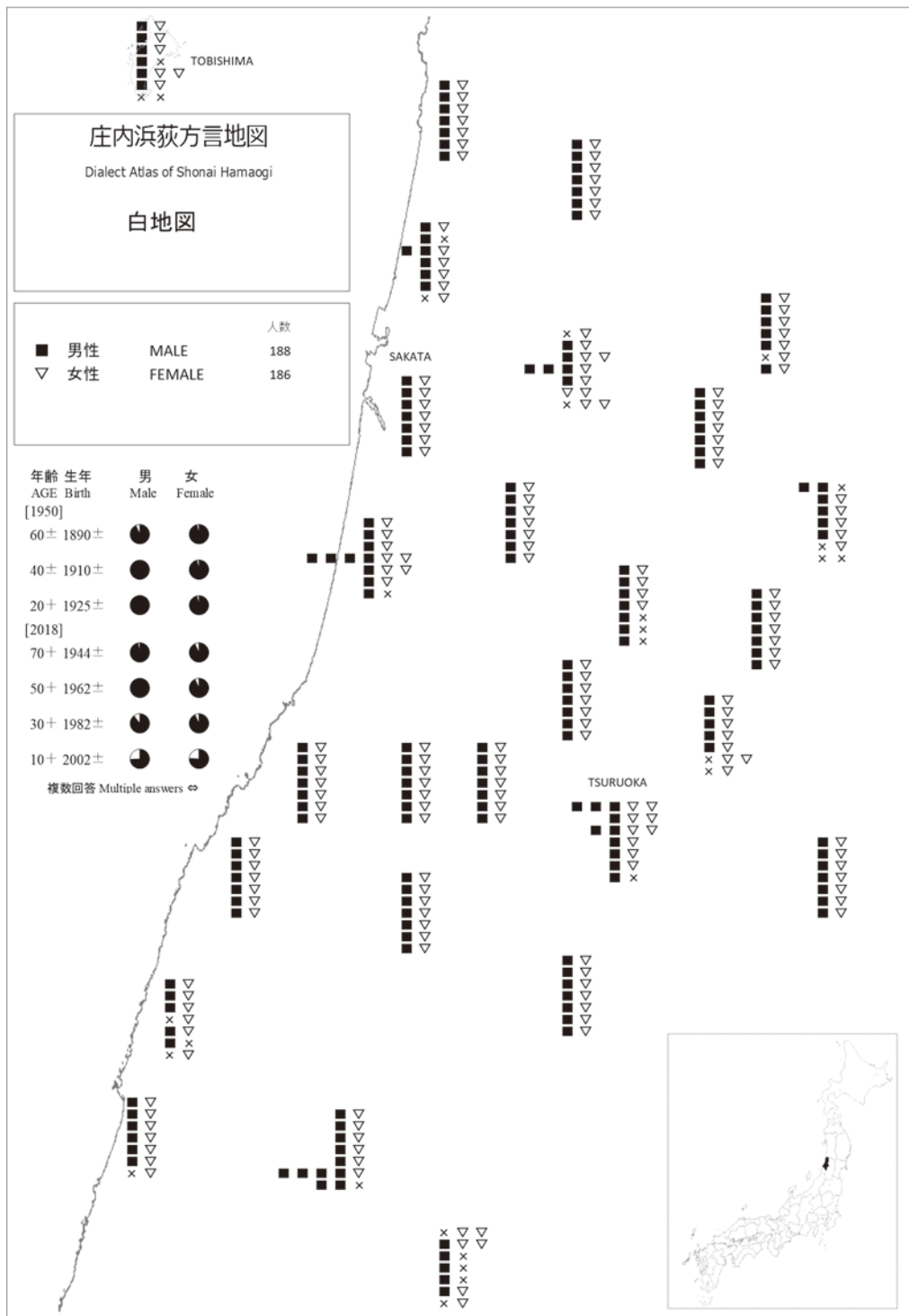
2回の調査結果を統合して作成した「年齢柱言語地図」(井上・半沢2019)の白地図として、各地点の調査達成状況を図2に示す。各地点に第1~7世代の順に記号を並べた。男性を右、女性を左側に示す。同世代に複数のインフォーマントがいる場合は、男性は右、女性は左へ伸ばして示した。たとえば「鶴岡」の第1世代は男性3名、女性2名から回答を得ている。×印はインフォーマントのみつからなかった欠損世代である。左下の円グラフに各世代・男女の調査達成率を示した。全27地点で当該世代から回答が得られた場合は達成率100%となって完全に黒い円が示される²。第7世代の達成率がやや低く、男女とも75%程度である。少子化、過疎化の影響もあって、各地点とも特に若い世代への依頼が難航した。北部の離島「飛島」は、調査当時島の中学校には酒田市内から移住した在校生がひとりしかおらず、第7世代のデータを得ることができなかった。

2.2.3. 調査票

第1次、第2次調査で用いた調査票について、図3.1、3.2にその一部を示す。第1次調査票は縦書き。『浜荻』掲載の方言形が「庄内ことば」として歴史的仮名遣いそのまま記載通りに示され、対応する「江戸ことば」がその下に配置されている。インフォーマントは語の上部にある記入欄に使用の有無(○×)を付し、さらに「使用しない」場合はインフォーマント自身の使用語を記入することが求められる。またその語形を別の意味で用いる場合の記入欄も設けられている。

この第1次調査票をベースとしつつ、第2次調査の調査票では若干の変更を加えた。全体を横書きとし、語形の表記は現代仮名遣いにあらためた。漢字もすべて仮名に開いて読みやすくしている。さらに、現代では使われなくなってしまった事物の名称など、現代人には理解が困難と思われる語については適宜補足説明を追加した。

それぞれの語形について、使用の有無のほか「聞く(△)」の記号を設定し、各語の理解状況に関するデータも収集した。自由記述欄には、第1次調査票に記入されていた俚言形を参考に浜荻語彙以外の語形も選択肢として示し、使用語があれば○を付けてもらった。



『庄内浜荻』方言地図 (国立国語研究所 NLRi 1950, 井上・半沢 Inoue & Harzawa 2018)

図2 調査達成状況 (「年齢柱言語地図」白地図)

同一の意味の俚言形が複数存在する場合、『浜荻』では両形が併記されることがある。たとえば魚の種類である「あいなめ」については「あぶらこ また しんじょう」のようにふたつの俚言形が記載されている。第1次調査票は『『浜荻』の記載通りに記す』との方針がとられ、こうした項目は併記のまま「庄内ことば」欄に示された。この場合○が付されたとしても、両形を使用するのか、あるいは一方のみを使用するのか判断としない。第2次調査票では、こうした double-barreled question を解消し、それぞれの語形について記入欄を分けて質問した。

00.1334

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.
常すも	上下ぎ	取上下	さるもの	すつぽつみ	たしこ	すそ	かぶりもの	ひらきたんな	たんご	はだこ	帯つき 裏帯	はまき	庄内ことば
常すも	はがまぎ	長ばかま	さるもの	はうかぶり	たすき	帯帽子	ぼうし	しんじょう	かばん	ちまき	あみぎ	かいどり	江戸ことば
													あなただけの庄内ことば
							カブリモノ						アケドリ
							帯のりすそ						その意味
													備考
													注

図 3.1 第1次調査票 (一部)

①	②	③	④	⑤
使用状況	江戸時代の『浜荻』のことば		1950年調査で回答されたことば	
項目番号	○使う △聞く ×知らない	『浜荻』の庄内ことば	『浜荻』の江戸ことば (備考・意味)	ご自分が使う方があれば、いくつでも○をつけてください。③欄に示した「江戸時代の庄内井」とまったく同じときも、○で囲んでください。その他の言い方
例 1	○	もる	(ごはんや社を)よそう	もる ぶそう よぞる つく
例 2	○	へら	(ごはんをよそう)しゃもじ	へら しゃもじ おしゃもじ
例 3	○	くわく	くわえる (口で)寝える	くわく くわく くわえる
例 4	△	めんごい	めんごい 可愛い	めんごい めんごい めんごい
例 5	△	くれる	やる	くれる ける けーる くれる
例 6	×	もしえ	おもしろい	おもしろ (おもしろ)
例 7	×	ずりがた	ずりかた 魚拓	ずりかた
1		はおりき	かいどり うちかけ	はおり うちかけ おけどり
2		おびつき	あみぎ 間着	おびつき あみぎ あみぎ
3		はだこ	じばん じゅばん	はだこ じばん じゅばん じゅばん
4		たんな	こしおび	たんな たんな おび
5		ひらきたんな	ひける寝帯/しごき 酒田	はばたんな しごき しごきおび おび
6		かぶりもの	ぼうし	かぶりもの ぼうし しゃつぷ
7		すそ	帯帽子 酒田	ゆきぼうし ぼっち すそ
8		たしこ	たすき	たしこ たすき
9		すつぽつみ	ほかぶり 頬(ほほ)かぶり	ほかぶり ほかぶり ほつかぶり
10		きもの	きもの	きもの きもの ふく ふく
11		ながかみしも	はがま	はがま はがま ながかみしも
12		かみしもぎ	はがま	かみしもぎ はがま はがま
13		おびする	帯しめる	おびする おびしめる
14		まめしぼり	一粒菓子	まめしぼり かのこ かのこ
15		ゆうぜん	さし入り 友禅絵	ゆうぜん ゆうぜんぞめ

図 3.2 第2次調査票 (一部)

3. 多重対応分析の結果

3.1. 基礎集計

以下では、この調査データを対象とした未公開の分析結果を一部紹介する。既発表論文や投稿中の論文において、紙幅の都合で掲載を断念した図などが含まれる。

まず第1次、第2次調査の基礎的な集計結果を示そう³。図 4.1 は第1世代の地点別浜荻語彙残存率を円グラフによって表したものである。グラフの黒色の部分は、浜荻語彙の使用率(「使用する」と回答した比率)を示す。各地点とも男女(一部地域を除き男女各1名)の平均値となる。地点による違いはあるが、1890年前後、明治生まれ世代では、『浜荻』に掲載された近世期俚言形のうち、おおよそ50~60%ぐらいが保持されていたことが分かる。

一方、図 4.2 は最若年層である第7世代、2000年前後に生まれたインフォーマントの結果である。浜荻語彙は「壊滅的」な状況であり、平成期にはこうした語形のほとんどが衰退してしまった。

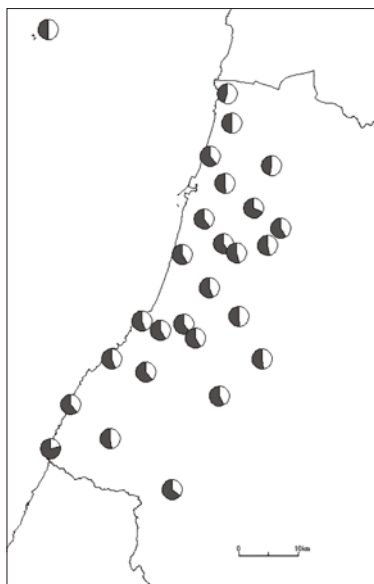


図 4.1 地点別残存率（第 1 世代）

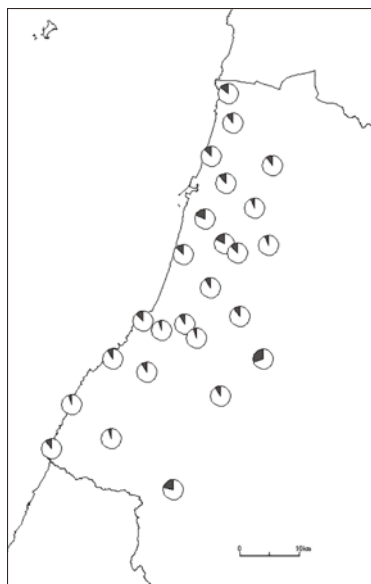


図 4.2 地点別残存率（第 7 世代）

3.2. 浜荻語彙使用の世代差

このデータに多変量解析を適用した。個々の語形の変動を確認すると、語によっては独自のふるまいを示すものもあり（井上・半沢 2021a）、406 語間に完全な含意性は認めがたい。3.1 に示すような単純加算による集計ではこうした独自傾向を示す語の状況を適切に反映できないため、多重対応分析によってデータ構造を反映したスコアを算出し、分析に用いる。

分析にあたり、欠損値（未回答）の多い 2 名の方を省いた 372 名×406 語のマトリクスを作成した。既述の通り、第 2 次調査については「言う/聞く/知らない」の 3 選択肢を設定したので、「聞く/知らない」を統合し、第 1 次調査に併せて「言う/言わない」の 2 値データへ変換している。

このデータへ多重対応分析を適用した。分析にはフリーソフト R の `corresp` 関数を用いた。析出された第 1 軸と第 2 軸のカテゴリスコアをプロットした結果を図 5 に示す。第 1 軸と第 2 軸の相関係数はそれぞれ 0.509, 0.247。第 1 軸の寄与率が 68% となり、この軸だけでデータの約 7 割を説明する。406 語形のラベルを示しても読み取りは不可能なので省略し、「言う」を●、「言わない」を×で示す。おおむね第 1 軸によって「言う/言わない」が分離され、この軸が俚言形使用の有無を示す。第 2 軸はその使用頻度を反映するものと考えられる。

この結果から、第 1 軸のサンプルスコア（各インフォーマントのスコア）が、インフォーマントの方言使用度を反映するとみなすことができる。試みに各インフォーマントの使用語数を求め、その結果と第 1 軸サンプルスコアとの相関係数を算出すると 0.987 となる。

この第 1 軸サンプルスコアをインフォーマントの年齢層（10 年）ごとの平均値で集計し、グラフ化したのが図 6 である。第 1 次調査と第 2 次調査を分けて集計したが、2 回の結果がきれいにつながり、逆 S 字カーブを描く。戦後、急速に浜荻語彙の衰退が進んだことが示唆される⁴。

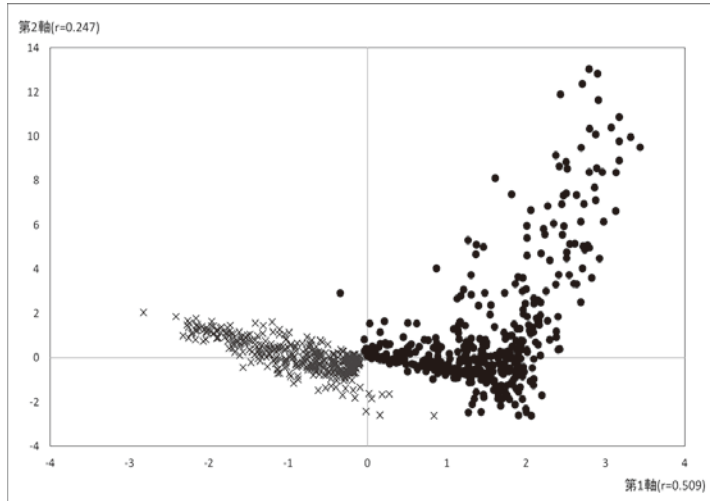


図5 カテゴリースコア散布図(第1軸×第2軸)

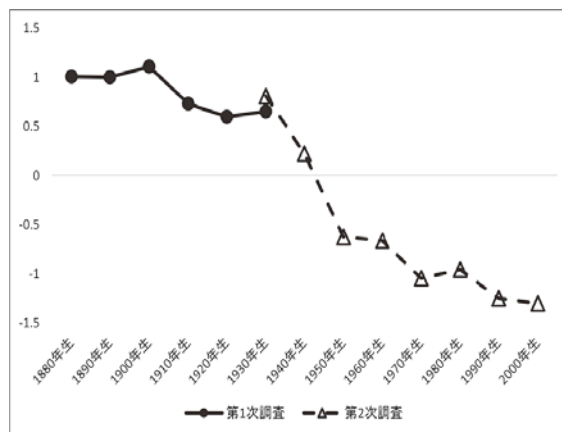


図6 第1軸サンプルスコアの世代差

3.3. 浜荻語彙使用の地域差

多重対応分析の結果、庄内地方内部の地域差が第4軸として析出された。第4軸の相関係数は0.150。第1軸とのプロット図である図7には、第4軸で正負の大きなスコアをとる語形のラベルのみを示した。

井上1977に掲載されたLASDの概略図を見ると、第4軸上でマイナス値をとる「てのこっば(手の甲)」の分布域は酒田市を含む庄内地方北部であり、他方プラスの値を示す「だんま(お手玉)」は鶴岡市を中心に庄内南部に広がる。また図7で「だんま」に近くプロットされる「くしびきずみ(炭の一種)」の調査結果を図8「単純化グロットグラム」⁵で確認すると、おおよそ南部の高年層(第1次調査のインフォーマント)のみで使用され、酒田以北にはほとんど確認できない。逆に図7において「てのこっば」に隣接する「やみさお(釣り竿)」が酒田以北に色濃く認められることは、図9「やみさお」の単純化グロットグラムにおいて確認できる。「やみ(釣り)」や「やみさお」については『浜荻』でも「酒田詞」との注記を付して地域差に言及されている(佐藤他2000)。

こうした結果から第4軸はおおよそ南部と北部の方言差を反映する軸とみなされる。

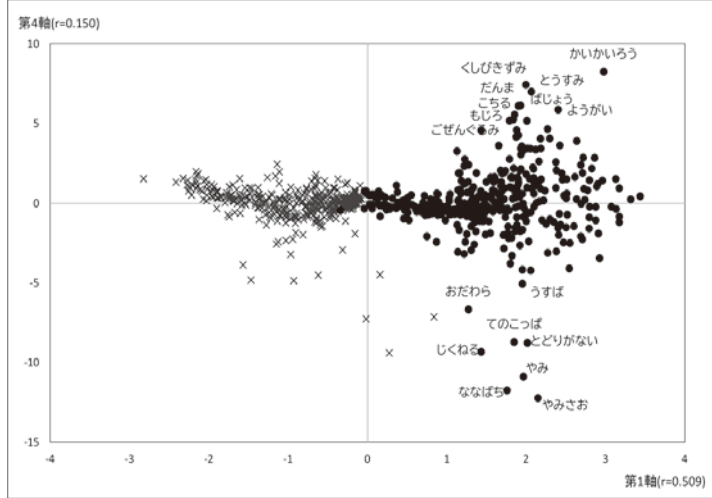


図7 カテゴリースコア散布図（第1軸×第4軸）

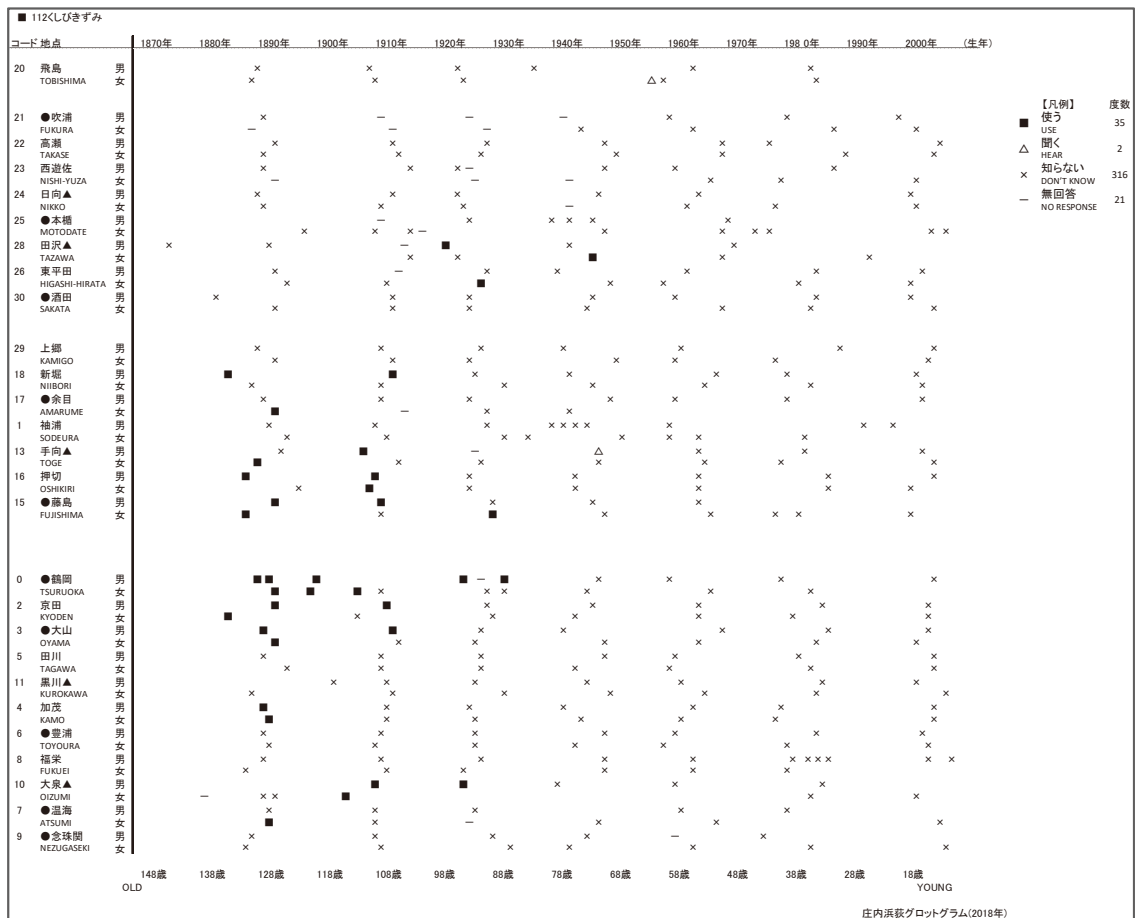


図8 単純化グロットグラム・くしびぎずみ

最も高かった（井上・半沢 2021c）。これが旧温海町の第1軸スコアを押し上げたものと思われる。また第2次調査では飛鳥が最右端に位置するが、これは飛鳥で第7世代のインフォーマントが得られず、年齢層の高い世代のデータしかないことが影響したものであろう。

地域差を反映する第4軸については、第1次、第2次調査間で顕著な差異が認められる。第1次調査の結果は図10と同様、庄内地方南北の違いが明確だが、第2次調査でこの地域差は鈍化する。第2次調査の結果（図11の左側）を見ると、南部と北部の市町村が第4軸のプラスマイナスによってかろうじて分離されてはいるものの、その距離は第1次調査に比べて著しく縮小している。第1次調査の時点では南北の方言差を形成していたさまざまな俚言形が衰退し、結果的に庄内地方内部の均質化が進んだ様子がとらえられている⁷。

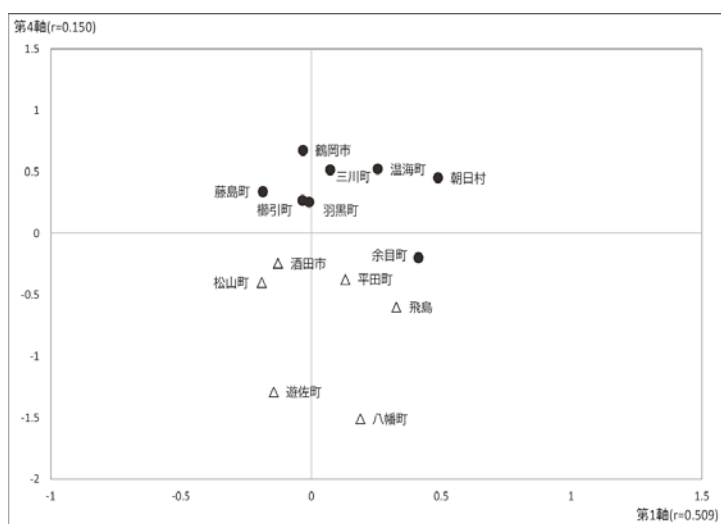


図10 サンプルスコア散布図（第1軸×第4軸：旧市町村別）

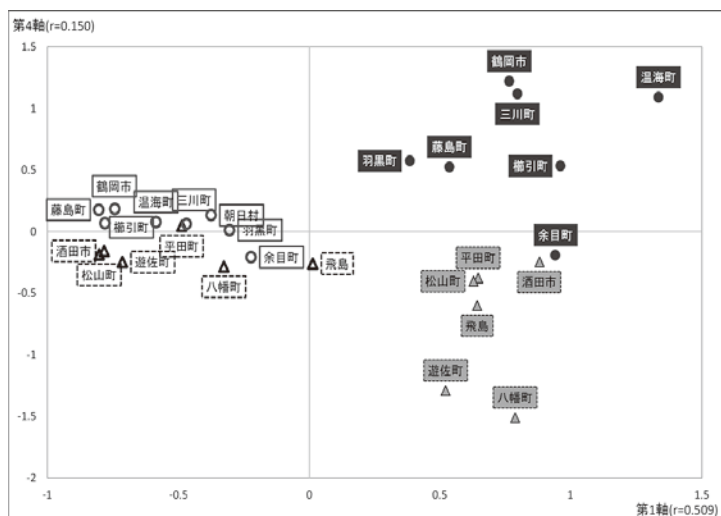


図11 サンプルスコア散布図（第1軸×第4軸：旧市町村・調査別）

3.4. 浜荻語彙使用の地域差の詳細

3.3 でみた地域差を、より詳細に、地点ごとに概観してみよう。多重対応分析で得られたサンプルスコアを27地点ごとに集計し、その平均値を地図上に示した。ここでは「自由回答型（フリーチェック）」データとして406語の「言う」のみの回答を取り出して分析した結果を用いる。関連する論考（Inoue & Hanzawa in press, 井上・半沢 2021a, 2021c, 投稿中）ではいずれもこの分析結果にもとづいて考察を行っている。

地域差にかかわる軸として析出された2~4軸（井上・半沢 投稿中）のサンプルスコアを27地点ごとに集計し、図12.1~12.3に地図として示した。いずれの図も、サンプルスコアの正負を■と○で表示し、その大きさで絶対値の大小を表した。

第2軸（図12.1）では南端の鼠ヶ関が大きなプラス値をとる。既述の通り、鼠ヶ関は浜荻語彙の残存率が高く、古い語形をよく保存している地域であり、そうした傾向が反映されている。さらに詳しく見ると、鼠ヶ関と同様プラス値を示す地域（■）は、おおよそ調査地点の外縁、山間部（と離島である飛鳥）に多く見られ、こうした地域において浜荻語彙がマイナス値をとる地点（○）を取り巻くように広がる。中心地鶴岡から離れた中山間地域や離島に古い俚言形が残存するという周囲的な分布パターンを示している。

第3軸（図12.2）と第4軸（図12.3）は第2軸のとらえた地域差をさらに細分化する軸とみられる（井上・半沢 投稿中）。第3軸では、たとえば図9に示した「やみさお」がプラスの大きなカテゴリースコアを得る。周囲分布のうち、特に北部を中心に分布・残存する傾向を反映する軸と判断できる。一方、図8「くしびきずみ」は第3軸とともに第4軸でもマイナス値をとる。グロットグラムの状況からみて、第4軸は北部と南部の残存状況の異なりを表す軸であると考えられる。

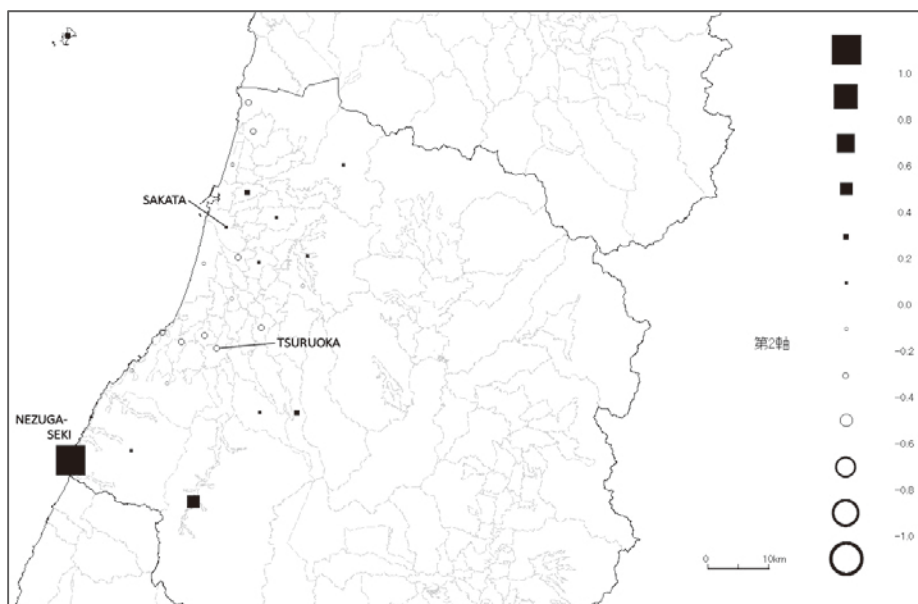


図12.1 サンプルスコア地図（フリーチェックデータ・第2軸）

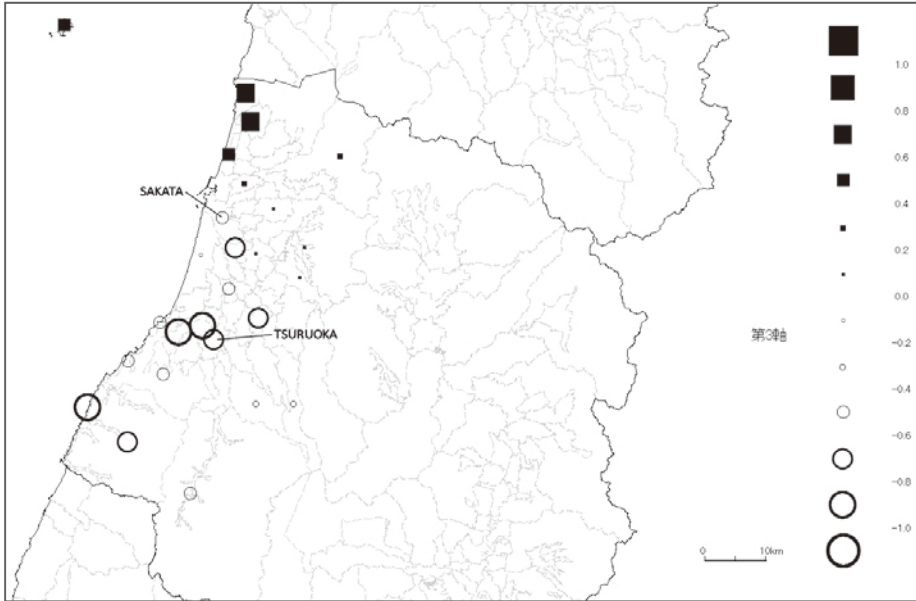


図 12.2 サンプルスコア地図（フリーチェックデータ・第3軸）

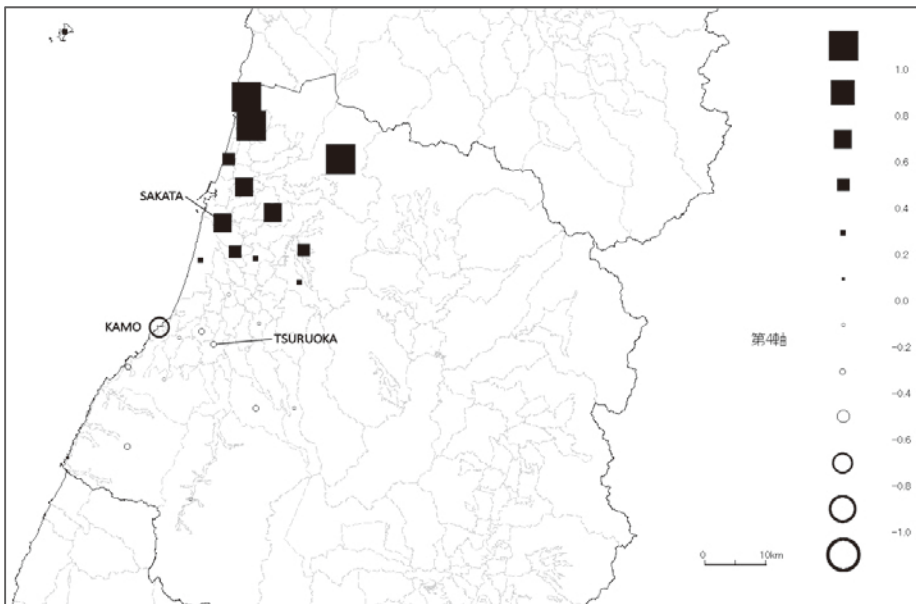


図 12.3 サンプルスコア地図（フリーチェックデータ・第4軸）

4. 羽越線グロットグラムデータとの比較

以上、浜荻語彙調査データの分析の一端を紹介した。ここまでの結果はあくまでも『浜荻』に掲載された語彙を中心とする伝統的な方言形に関する結果である。別の方言事象、たとえば方言特徴が比較的保持されやすいとされる文法事象の場合はまた傾向が異なる可能性もある。そこで同じ庄内地方で実施

した他の調査データについても同様に分析を行い、結果を比較してみよう。

用いるデータは日本海沿岸で実施したグロットグラム調査によって得られたものである（井上編2008）。2004年から2005年にかけて、青森県から富山県まで、日本海沿岸を走る鉄道路線に沿って調査を行い、その後最終的に京都まで延伸した。庄内地方では2005年に羽越線の16駅周辺の地点で調査を行っている。さらに2017年と18年には、北海道から石川県までの日本海離島を対象に同様のグロットグラム調査を行い、その中で飛島でも調査を行った。

羽越線調査データに離島調査の飛島データを加え、浜荻データと同様に多重対応分析を適用した。羽越線（および離島）調査でも、語彙項目（や若者語、新語項目、音声項目）を取り上げているが、今回はこれらを省き、文法79項目のみを対象とした。いずれも共通語翻訳式による面接調査であり、各項目について（たとえば共通語形と方言形の）複数の回答が得られる場合がある。特定の語形を示し、その使用の有無を尋ねるといった浜荻調査の形式とはこの点で異なる⁸。各項目で回答された形式は少数例を除いても300にのぼる。これら個々の語形をすべて変数として「使用/不使用」の2値データに変換し、全インフォーマント62名×300語のデータマトリクスを作成した。

図13は、第1軸と第2軸のサンプルスコアを16地点別に集計して作成した散布図である⁹。調査地点を「平成の大合併」以前の市町村に分け、各地点をプロットした。三角形は北部の遊佐町（灰色）および酒田市（黒）、丸は南部の鶴岡市（黒）、旧温海町（灰色）の地点（いずれも駅名で表示）を示す。白抜き丸は旧東田川郡内の地点である。第1軸によって北部と南部の地点が大きく分離される。南北境界付近の余目がやや北寄りに位置付けられる点も含め、各地点の相対的な位置関係は図10浜荻データの結果と類似する¹⁰。

この結果は2000年代に入ってから調査データにもとづくものであり、にもかかわらず図11に示す第2次調査の結果とは違って、南北の地域差が明確に保持されている。特に地域差が第1軸として析出されるのは興味深い。福島県や宮城県など、同じ東北部で1990年代以降に実施したグロットグラムデータを同様に分析すると、共通語化の影響が強く、決まって第1軸には「年齢差」が析出される。庄内の場合は（少なくとも文法事象についていえば）いまだ域内の地域差が健在であることがうかがえよう¹¹。

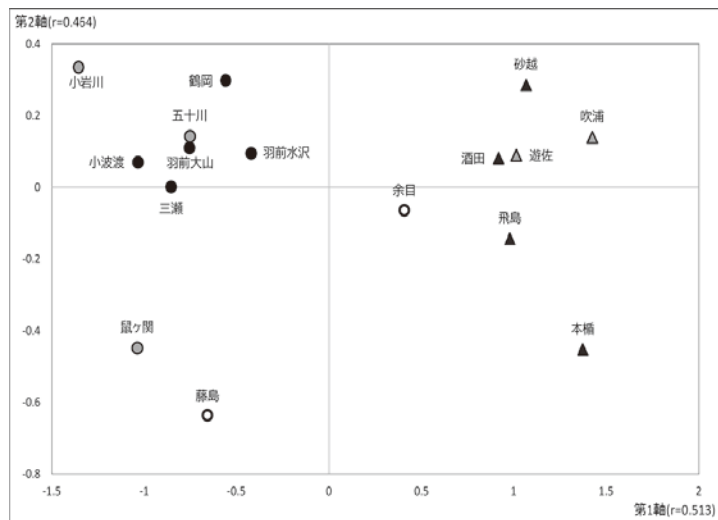


図13 サンプルスコア散布図（第1軸×第2軸：羽越線・離島調査）

5. おわりに

以上、山形県庄内地方で実施した浜荻語彙に関する調査の概要を述べるとともに、未公開であった一部の分析結果を紹介した。本調査データに関する詳細な分析と考察結果は後掲の文献リストに示す別稿にて公表している。それらについてもぜひ参照いただきたい。

また現在は第1次、第2次調査の自由記述回答欄に記入された浜荻語彙以外の俚言形のデータ整理と分析を進めている。その結果についても追って公表の予定である。

注

- 1 報告書には427語とあるが、確認した調査票では406項目が設定されている。
- 2 井上・半沢2019の図では、達成率ではなく各語形の使用率を示している。
- 3 第1次、第2次調査の結果を統一して扱うため以下の分析では第1次調査票にあわせて406項目を対象とする。第2次調査でふたつに分割した項目については、2語形のうち少なくとも一方に○が付された場合は「使用する」として扱った。
- 4 同様の分析結果は井上・半沢(投稿中)にも示されている。
- 5 「年齢柱言語地図」の地理平面情報を捨象して、戦前の5万分の1地図による鶴岡からの道路距離(1次元)に圧縮し、簡略化して示した(井上・半沢投稿中)。
- 6 離島である飛鳥は酒田市に含めず別に集計した。
- 7 第1次調査と第2次調査で地理と年齢の要因効果に変化がみられることは、井上・半沢(2021a)で詳細に論じられている。
- 8 ただしアングダ(のだ、パー(だろ))については、浜荻調査と同様に語形を提示し、使用の有無を尋ねている。
- 9 最北部の地点女鹿は少年層1名のみしか調査できなかったため分析に含めない。多重対応分析を適用したのは離島調査の飛鳥を含めた16地点となる。
- 10 第2軸のサンプルスコアはインフォーマントの生年との相関を示す($r=0.805$)。共通語化を反映した年齢差を示す軸とみなしうる。
- 11 ただし羽越線調査からはすでに15年が経過しており、その後の若い世代ではこうした文法事象の地域差が継承されず、浜荻語彙と同様に共通語化が進行している可能性もある。この点についてはさらなる検証が必要となる。

引用文献

- 井上史雄(1977)「方言の分布と変遷」『岩波講座日本語11方言』岩波書店
- 井上史雄(1985)『新しい日本語—《新方言》の分布と変化—』明治書院
- 井上史雄(1994)『方言学の新天地』明治書院
- 井上史雄(2000)『東北方言の変遷—庄内方言歴史言語学的貢献—』秋山書店
- 井上史雄(2005)『鶴岡市山添地区の共通語化と新方言』科研費報告書
- 井上史雄(2011)『鶴岡市山添地区の新方言と発音』宮田研究奨励金成果報告書
- 井上史雄(2018)「平成の方言—鶴岡の250年間の言語変化—」『日本語学』37-10
- 井上史雄編(2008)『日本海沿岸地域方言の地理的・年齢的分布』科研費報告書
- 井上史雄・見野久幸・菅原義勝編(2018)『楽しい庄内方言まんが—鳥羽絵磯釣の部 五一—』荘内日報社
- 井上史雄・半沢康(2019)『庄内浜荻方言地図 Dialect Atlas of Shonai Hamaogi (DASH)』科研費報告 CD-ROM
- 井上史雄・半沢康(2021a)「方言語彙の地域差と年齢差—庄内浜荻調査2回の多重対応分析—」『福島大学地域創造』32-2
- 井上史雄・半沢康(2021b)「方言衰退の語彙論的過程—庄内浜荻の250年—」『日本語の研究』17-1
- 井上史雄・半沢康(2021c)「方言語彙残存と鉄道交通—『庄内浜荻』の方言語彙残存率—」『社会言語科学』24-1
- 井上史雄・半沢康(投稿中)「方言の地域差から年齢差へ—庄内浜荻グロットグラムの多重対応分析—」『言語研究』
- Inoue Fumio and Hanzawa Yasushi (2020) Dialect vocabulary changes over 140 years — Standardization and new dialect forms observed in Hamaogi glossary —, *Dialectologia: et Geolinguistica* 28: 105-116
- Inoue Fumio and Hanzawa Yasushi (in press) Multivariate analysis of geography and age in dialect vocabulary — Comprehensive

analysis of 250 years of language change 一, *Dialectologia : revista electronica*.

国立国語研究所 (1953) 『地域社会の言語生活—鶴岡における実態調査—』秀英出版

佐藤武義・木村晟・山田瑩徹・古瀬順一・片山晴賢編 (2000) 『近世方言辞書 第2輯』港の人

統計数理研究所・国立国語研究所 (2014) 『第4回鶴岡市における言語調査 ランダムサンプリング調査の概要 資料編 :

第1分冊「音声・音韻」編』(https://www2.ninjal.ac.jp/longitudinal/files/tsuruoka4_report01.pdf)

林英夫 (2006) 『郵送調査法』関西大学出版部

謝辞

本稿は第1回日本地理言語学会 (2019年10月6日, 青山学院大学) での口頭発表にもとづく。

また本稿はJSPS科研費JP16H03420, JP20K00642助成研究の成果の一部である。研究代表者である東京外国語大学名誉教授 井上史雄先生には, 調査の実施から分析・考察にいたるまで, 本研究のあらゆる面においてさまざまにご指導を賜っている。この場をお借りして, あらためて厚く御礼を申し上げます。

(2021年4月16日受理)

Multivariate Analysis of Survey Data of “Shonai Hamaogi”

HANZAWA Yasushi

This paper reports on a survey of dialects conducted in the Shonai district of Yamagata Prefecture. The survey was conducted in 1950 and 2018 to examine the remnant rate of the vocabulary items in the “Shonai Hamaogi”, dialect glossary of Tsuruoka. Analysis of the data have been partially presented in several papers, but details of the investigation had to be omitted due to space constraints. This paper explains gives a fully-detailed analysis and additionally presents an unpublished analysis using multiple correspondence analysis.